

シャーロキアンの戯言

成 田 圭 市

シャイロキアンにあらず

日本シャーロック・ホームズ・クラブ（JSHC）の会員であると人に告げると、まず大方の反応は、「何を物好きか」と苦笑ないし嘲笑するか、さもなければ、そんなへんてこな集まりがこの世に本当に存在しえるのかと怪訝がるかのいずれかであろう。あるいは、ホームズのトレード・マークとしてすっかり定着してしまったパイプとインヴァネス・コートと鹿打帽を連想して、この3種の神器を身に付けていない私を不審に眺める人もいるかも知れない。ある時など、「それではあなたはシャイロキアンなのですね」と真顔で言われたことさえある。確かに、シャーロキアンと名乗りながら、我らが名探偵をだしに専ら利潤追求活動にうつつを抜かずやからもなきにしもあらずなので、「シャイロキアン」とは言い得て妙と感心も寒心もしてしまった。が、JSHCの名誉のために付け加えるならば、1978年発足以来全国に会員千数百名を擁するに至ったこの団体の会員のほとんどは、シャーロック・ホームズ、そして彼の登場する事件簿、をこよなく愛する真摯なシャーロキアンの紳士淑女である（と私は思っている）。

ついでながら、ホームズの名誉のために付け加えれば、世間一般の思いこみとは裏腹に、彼は四六時中インヴァネスと鹿打帽に身を包みパイプをくわえていたわけではない。ロンドン市内ではまずそんな格好では出歩かなかったし、パイプ以外に紙巻き煙草や葉巻も大いに愛用していたのである。さらに私の名誉のために付け加えれば、日常生活ではめったに着用しないものの、シャーロキアンを自認する以上はインヴァネスも鹿打帽もパイプも勿論所有している

し、かつ、時折身に付けては悦に入ったりしている。のみならず、ホームズがトテナム・コートの一軒で格安で手に入れたと自慢したストラディヴァリウスのコピーをお茶の水の一軒で入手して、残念ながら物にはならなかったが、半年ほどはヴァイオリンのレッスンに明け暮れたことさえある。ふだんの生活において、散らかり放題の部屋で日がな一日人生の退屈を嘆いて怠惰に過ごすことの多かったホームズの癖に十分に倣っている点でも、シャーロキアンとして人後に落ちないと自負しているのである。

六日の勝負

シャーロキアンで思い出したが、ホームズの誕生日として一応の定説（ただし異論も多い）となっている1854年1月6日という日付も、シェイクスピアの作品にいささかながら関連している。

長編4編、短編56編の全60編に及ぶホームズ冒険談のほとんどは、医学博士ジョン・H・ワトスンが記録した体裁をとっているが、この先生、記録を出版するに当たって、細かい日付だの事件とは余り関係のない些末事だのの細部にはほとんど注意を払ってくれなかったのが実状である。それがために、一世紀以上も時空間を隔てた今日でさえ、シャーロキアンの間に汲めども尽きぬ論争の種を提供してくれているわけである。

そんなわけで、ホームズ生誕という記念すべき日時も、当然のことながら正典（シャーロキアンにとって、ホームズが活躍する事件簿は聖なる書物なのである。英語では“the Canon”である。一方、ワトスン博士の筆によるものか否か疑わしい作品がアポクリファと呼ばれているのも言うまでもない。ただし、その区別は明確ではない。）のどこをひっくり返したところで何の記述も見当たらない。それでも、正典を丹念に調べてみれば、「最後の挨拶」と題された事件簿には1914年に60才であるという記載があるので、1854年という生年はまず間違いなさそうである。（私の生年のちょうど百年前という個人的な理由

からも、私はこの説を採りたい)。

では、1月6日とする根拠は何かと言えば、根拠と言うのもおこがましいのだが、ホームズがシェイクスピアの『十二夜』から二度も引用しているというだけのことである。シェイクスピア出典と思われる言葉をホームズは時折口にしてはいるものの、二度も引用しているのが『十二夜』だけなのは、きっと自分の誕生日に関係した作品なので愛着があるのだろうというわけである。もっとも、愛着を持っているくせに正確に引用できないとは情けない話であるけれども(「空き家の冒険」では“Journeys end in lovers' meetings”だし、「赤い輪」事件では“Journeys end with lover's meetings”)。

こんな薄弱きまわりない拠りどころから出た説とは言え、斯界の権威の一人であるW・S・ベアリング＝グールドの著したホームズの伝記(小林司・東山あかね訳『シャーロック・ホームズーガス燈に浮かぶその生涯』河出文庫)もこれを踏襲しており、「早い者勝ち」をその支配原理とするシャーロキアンの世界では、今更この日付に異議を唱えてみたところで、十日の菊となって散るのが落ちであろう。ちなみに、この説を最初に提唱したフェリックス・モーリーという人自身の誕生日も同じく1月6日だったそうで、モーリーさんしてみれば、尊敬してやまない名探偵と同じ日に生まれたという偶然を発見して大喜びしたに違いない。

そもそもシャーロコロジー(シャーロック学)では、正典を唯一かつ絶対的権威とみなすのが正統であるから、どんな珍妙な説であろうと、正典との整合性を保ち正典内にその反証が見いだされぬ限りは一定の説として成立する。早い話が、正典のどこにもホームズの誕生日が1月6日でないことを示す記述がない以上、1月6日が誕生日で一向に構わないわけで、後はその仮説を正典の記述によって補強して行くだけである。例えば、ホームズ自身が記述した形になっている「白面の兵士」という事件簿は、「1903年1月」「月曜」「冴えた半月の夜」という記述から1903年1月5日が発端であることが研究者により突き止められているが、その二日後つまり1月7日の記録にホームズは、「ワトス

ンは私を置き去りに結婚していた...私は一人ぼっちだったのである。」と珍しくも女々しいほどの弱音を吐いている。これなども、前日の自分の誕生日を誰からも祝われなかった寂しさがつい出しまったものと解釈出来ない事もない。

もっとも、ホームズが誕生日などという些末事に拘泥するような人間だったか否かは議論の分かれるところであるが、1月6日説の旗手の一人N・L・ベンジスは、『恐怖の谷』事件の冒頭、1888年1月7日のペイカー街での朝食の場面を引いて、ホームズが「朝食に手も付けずに頬杖をついていた」のは、その前夜催されたに違いない誕生祝いでの飲み過ぎが祟って二日酔いで食欲がなかったためだし、ホームズがワトスンにつっけんどんな態度をとったのは、ワトスンが毎年恒例のバースディ・プレゼントを忘れてしまっていたからだと解説している。

信じぬ者は報われぬ

上で述べたように、正典を絶対的権威と見なすのが正統であると私は常々考えているのだが、シャーロキアンの中には、不遜にも正典の内容そのものに疑義をさし挟む困った人たちもいる。例えば、有名な「まだらの紐」事件では、ロイロット博士が財産目当てに義理の娘を調教した毒蛇で殺したことになっている。これについて、蛇が噛んだ傷跡や体内の毒を検死官が発見できなかったのはおかしい、蛇を鉄製金庫内で飼育すれば窒息死するはず、牛乳で蛇を訓練する事など不可能、口笛で蛇を呼び戻したとあるが蛇には音など聞こえはしない、などなどの難癖をつけて、ホームズの推理が間違っていたという主張したのは中川裕郎氏である（『ホームズは女だった』早川書房）。この手のこましゃくれた議論に対しては、ヴィクトリア朝の性の抑圧を背景としたワトスン博士一流のアレゴリーなのだと応じるよりは、そういう蛇がいたのだ、異端者め正典を冒瀆するのか、とナイーブに反論する方がはるかに気が利いている。

今一つ、正典の記述に疑いの目を向けたシャーロキアンがどういう目にあう

かを端的に示すエピソードを紹介しよう。正典の中でも特に有名な「赤髪組合」は、とある質屋とその裏隣に位置する銀行との間に掘られた地下トンネルをホームズが発見して盗難を未然に防ぐというものだった。質屋の店員になりすました犯人の一人のスボンの膝を観察し、舗道をステッキで叩いて地下トンネルの方向を確かめた上で、質屋の地下室から銀行に向かって地下にトンネルが掘られているに違いないとホームズは推理したのである。

この推理をどう取るか。私など、ホームズに「あのときステッキで舗石のうえを突いたので、変なことをすると思ったろうが、あれはね、トンネルが果たして家の前の方へ掘り進められているかどうか、それを確かめたんだよ。」と種明かしされただけで、ワトスン博士よろしくそうだったのかと感心してしまう。シャーロキアンたる者、無謬性の権化ともいうべきホームズの発言は、すべて普遍の真理として恭しく傾聴すべきなのである。

ところが、大学で土木を学んだ横浜のシャーロキアン田中喜芳氏は、果たしてステッキで叩いただけで地下トンネルの有無やその方向までわかるものかとの疑念が高じて、当時の舗装技術を研究した上でついには自宅の庭先にホームズが叩いたのと同様のトンネルを実際に作り、自らステッキで地面を叩いてみたそうである。

案に反してというべきか、当然というべきか、トンネルの有無に関わらず、ステッキのたてる音は全く同じものであった。しかし、田中氏、黙々とトンネルを掘りながら、思うところあって改心したのであろう、ホームズの推理はでたらめだなどと暴言を吐かなかったところが立派である。結論付けて曰く、「ホームズは人並はずれて鋭い聴覚の持ち主だったに違いない」。

正典とは何だ

ところで、先ほどから絶対的権威として何度も引き合いに出している「正典」の範囲が実は明確ではなく、何を正典と認めるかに関して必ずしもシャー

ロキアンの間で共通した了解があるわけではない点も指摘しておこう。

一般的には、コナン・ドイルを出版代理人として9冊の単行本の形で出版された長編4編、短編56編からなる全60編のホームズ冒険談を正典と見るのが常識的な解釈であろう。しかし、*A Sherlock Holmes Commentary*の著者D・M・デイキンなどは、特に後期の短編の幾つかはその内容・文体から見て正典とは認め難いと厳しい意見を述べている。一例だけ挙げると、「三破風館」では、ホームズが黒人のスティーブ・ディキシーに対し差別的な言動を行っていることがデイキンのお気に召さないらしく、紳士たるホームズが人種の特徴をあげつらって他人をあざけったりするはずがないという理由（他にも細かな理由が挙げられてはいる）で、この作品の正典性に疑いの目を向けている。これなど、現代の我々の倫理観や行動規範に基づいて当時の人々を判断するのがそもそもの間違いなのであって、ヴィクトリア朝に生きたホームズであるが故に非白人に対する偏見からは逃れようがなかったというのが真相だろう。

他方では、こうした厳格な立場とは逆に、ホームズの活躍を記録してあるものなら全て正典と認めるという極端な立場があってもおかしくないはずだし、私はどちらかと言えばこの考え方に近いのだが、どういうわけかコナン・ドイルという出版代理人の名前が冠されたものだけをアプリアリに正典と認めるというシャーロキアンが圧倒的に多い。

1887年に記念すべき最初の事件簿（『緋色の研究』）が発表されて以来、出版代理人たるコナン・ドイルの名を冠した60編以外にも、ワトスン博士の「未発表原稿」は続々と発掘され続けているのが現状であり、エイドリアン・ドイル（コナン・ドイルの息子）とディクソン・カーが共同で発表した『シャーロック・ホームズの功績』やエラリー・クイーンの『恐怖の研究』、新しいところではニコラス・メイヤーの『シャーロック・ホームズ氏の素敵な冒険』など、いずれもホームズの多岐にわたる活動の跡を辿る貴重な一次資料である。

にもかかわらず、前述のベアリング＝グールドの伝記、ジャック・トレシーが著した『エンサイクロペディア・シャーロキアーナ』、S・R・ビュラー

ドと M・L・コリンズが編集した *Who's Who in Sherlock Holmes*, といったシャーロキアンの基本参考図書のどのページをひもといても、こうした新発見の事件簿は一言も言及されていない有り様である。また、ホームズが関わった事件を年代順に並べてホームズ年代記を作成する仕事もシャーロキアンの重要な研究課題の一つで、欧米では著名なものだけでも既に5冊ほど出版されているし、昨年夏に開催された第3回 JSHC 軽井沢セミナーでも、進士順一氏が長年の研究成果を披露したが、どの年代記を当たっても対象とされているのは前述の60編だけで、それ以外の事件は理由もなく等閑に付されてしまっているようだ。

ヴィクトリア朝後期のロンドンに活動したシャーロック・ホームズであるからには、「切り裂きジャック」事件に際しては当然スコットランド・ヤードから応援を求められたに違いないし（エラリー・クイーン『恐怖の研究』、ニコラス・メイヤー『ウェスト・エンドの恐怖』）、大英博物館では滞英中のカール・マルクスとも出会ったであろう（アレクシス・ルカーユ『シャーロック・ホームズを訪れたカール・マルクス』）。怪人フー・マンチュウとの対決（ケイ・ヴァン・アッシュ *Ten Years Beyond Baker Street*）、奇術の名手フーディニとの出会い（D・スタシャワー『ロンドンの超能力男』）、さらにはジキル博士やドラキュラ伯爵との対決（L・D・エスルマン *Dr. Jekyll And Mr. Holmes, Sherlock Holmes Vs. Dracula*）なども、ホームズの多彩な活動を示す挿話として見落とせない。世紀末のウィーンでフロイト博士から麻薬中毒の治療を受けたという驚くべき事実（ニコラス・メイヤー『シャーロック・ホームズ氏の素敵な冒険』）も、近年になってようやく明らかにされたばかりである。探偵嫌いで有名だった漱石もロンドンに留学した折にはホームズの助けを請わざるを得なかっただろうし（山田風太郎「黄色い下宿人」、島田荘司『漱石と倫敦ミイラ殺人事件』）、晩年にはバートランド・ラッセルからの依頼でケンブリッジに出向き、ヴィトゲンシュタインが巻き込まれた事件を解明する過程で、ケインズ、ヴァージニア・ウルフ、リットン・ストレイチャーたちとも出

会ったのであった（ランドール・コリンズ *The Case of the Philosophers' Ring*）。

このような同時代の著名人たちとの関わりは、まだまだいくらでも挙げられる。問題は、何故これらの新たに発掘された一次資料が正典と認められないのかという点である。内容が荒唐無稽だとか、語り口がワトスン博士らしくないとか、単なる印象批評の域を出ない理屈など、何の根拠にもなるまい。いやしくもシャーロキアンを名乗るからには、内容に関しての精緻な調査と科学的な文体分析を経た上で正典かどうかの判断が下されるべきなのである。

また、「そんなこと言ったって、コナン・ドイルが書いたものではないじゃないか」と安易に言い張る似非シャーロキアンを相手にするつもりも毛頭無い。コナン・ドイルの存在を認めるか否かというそもそもの出発点が異なる以上、同じ土俵で議論することなど到底不可能だからである。私に言わせれば、Canon と Conan というアナグラム関係以外正典とは一切無関係のコナン・ドイルを引合いに出すようなやからは、コナニアンないしドイリアンと蔑んで呼ばれるべきで、かようなコナニアン＝ドイリアンたちは静かに心霊世界でも研究していれば良いのである。

つまるところ、正典ではないことを示す決定的な論証がなされていない事件簿はすべて正典と認める、というのがシャーロキアンとして唯一妥当な態度ではなかろうか。新たに発掘されたワトスン博士の未発表原稿として上に挙げた作品のいずれも、これまでのところ有効な反証が提示されていない以上、さしあたっては正典として認めるのが筋であろう。従って、事典類の基本参考図書は、それらの研究成果を取り入れて大巾に改訂されなければなるまいし、ホームズの伝記も相当の増補が必要であることは確かである。60編だけを対象としていけば事足りるとする偏狭な伝統とはきっぱり縁を切って、今こそ新たなシャーロコロジーの地平を切り開くべき時なのだ、とこの際思い切って宣言してしまおう。

終 わ り に

ここまで読んで、シャーロキアンとは他愛もない事柄にうつつを抜かすだけの何とも暇な物好きであることよとの認識を持った方、どうぞそのまま御自分の大切な人生を全うして下さい。シャーロキアンとはまさにその通りの人種なのであって、そうでないとしたら、わざわざ募金を募って信濃追分（正典翻訳で知られる延原謙ゆかりの地）にシャーロック・ホームズのブロンズ等身像を建立した事実を一体どう説明すれば良いのだろうか。

世の中には、なだらかな丘陵の広がる英国田園風景に心引かれる人もいれば、ワトスンは何回結婚したかだのホームズの出身大学はオックスフォードかケンブリッジかだのと、ほとんど何の役にも立たないたわごとの世界に心をなごませる人もいるというだけのこと。とは言うものの、毒にも薬にも決してなりえない駄文を書き終えて、果たして無用の用という言葉在世間の人々はシャーロキアンの世界にも適用してくれるだろうかとあらためて自問している次第。まあ、ホームズも常々「つまらないこと、ささいなことこそ実は最も重要なことなのだ」と言っていたことだし、今後もこれを座右の銘に重箱の隅をほじくするような研究に励んで行くつもりである。